現代におけるテロリスト組織のひとつに、ダーイシュ * があります。ダーイシュは宗教を悪用して若者をだまし、自分たちの勢力の拡大やイデオロギーの伸張の道具として宗教を扱っています。主にシリアとイラクで活動しているこの組織は、隣国であるトルコの若者たちを勧誘のターゲットにしています。このような組織に対抗するためにとるべき最初の、かつもっとも重要なステップとは、イスラームを正しく理解し、こうした組織がイスラームのどのような価値観を利用して搾取をはたらいているのかを知ることです。本書は一般読者の意識を高め、宗教を利用した搾取について注意を促し、正確な典拠に基づいて私たちの崇高な宗教を学ぶ重要性を伝えることを目的として制作されました。

* ダーイシュ、日本語での通称「イスラム国」

9784910474038

テロ組織による宗教の悪用について：

ダーイシュ編

DİYANET İŞLERİ BAŞKANLIĞI

テロ組織による宗教の悪用について：

ダーイシュ編

テロ組織による
宗教の悪用について：

ダーイシュ編

DİYANET İŞLERİ BAŞKANLIĞI

トルコ共和国宗務庁出版：1533
専門書：338

主幹
宗教出版本部

編集
宗教活動本部

印刷
Çağlayan A.Ş.
+90 232 274 22 15

第1版　アンカラ - 2018

監査委員会：18.10.2018/50

ISBN: 978-491-04-7403-8（日本語版）
2018-35-Y-0003-1533
認証番号：12931

© トルコ共和国宗務庁

問い合わせ先
宗教出版本部　外国語出版局
Dini Yayınlar Genel Müdürlüğü
Yabancı Dil ve Lehçelerde Yayınlar Daire Başkanlığı
Üniversiteler Mah. Dumlupınar Blv. No: 147/A 06800
Çankaya/Ankara/TÜRKİYE
Tel: +90 312 295 72 81
Fax: +90 312 284 72 88
E-mail: yabancidiller@diyanet.gov.tr

宗教を名乗り、
イスラームの代表者を装って
不和を生じさせ、
流血をもたらすテロ組織。
彼らは物質的にも精神的にも
ムスリムを搾取している。
最大の損害をこうむっているのは
ムスリム社会であり、
また団結と連帯、
私たちの未来、
そして若者たちである。

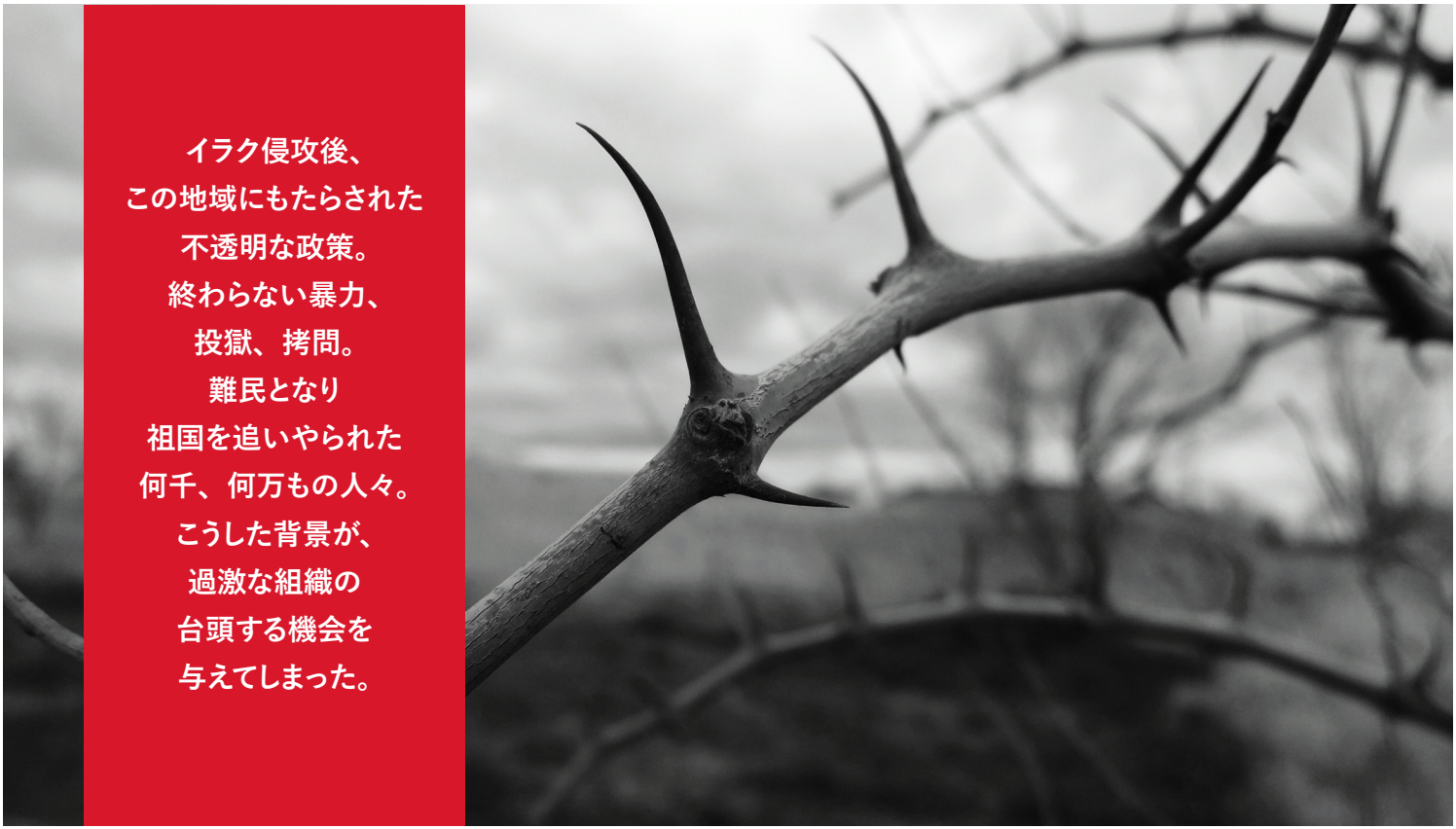
現代におけるテロリスト組織のひとつに、ダーイシュ（訳注：通称「イスラム国」）があります。ダーイシュは宗教を悪用して若者をだまし、自分たちの勢力の拡大やイデオロギーの伸張の道具として宗教を扱っています。主にシリアとイラクで活動しているこの組織は、隣国であるトルコの若者たちを勧誘のターゲットにしています。このような組織に対抗するためにとるべき最初の、かつもっとも重要なステップとは、イスラームを正しく理解し、こうした組織がイスラームのどのような価値観を利用して搾取をはたらいているのかを知ることです。本書は一般読者の意識を高め、宗教を利用した搾取について注意を促し、正確な典拠に基づいて私たちの崇高な宗教を学ぶ重要性を伝えることを目的として制作されました。

宗教を利用した搾取とは

「搾取」とは、個人または集団の善意を悪用したり、乱用したりすることを意味します。宗教を利用した搾取とは、宗教を悪用し、宗教上の概念や価値観を装って人々を欺き、物質的な、あるいは精神的な利益を得ることを意味します。言い換えるなら、私利私欲のために宗教を利用することです。

歴史を振り返れば、宗教が人に与える影響を利用

テロ組織による宗教の悪用について：ダーイシュ編



**イラク侵攻後、
この地域にもたらされた
不透明な政策。
終わらない暴力、
投獄、拷問。
難民となり
祖国を追いやられた
何千、何万もの人々。
こうした背景が、
過激な組織の
台頭する機会を
与えてしまった。**

してさまざまな利益を得ようとした個人や集団は数多く存在しました。彼らは宗教家を名乗り、宗教を売りものにすることに何の躊躇もありませんでした。こうした個人や集団は、あるときはクルアーンの章句やハディースの意味を歪め、何の脈絡もなく引用したり、またあるときは社会に向けて、自分たちの悪意を正当化するための誤った解釈を発信したりしました。その他、宗教それ自体を攻撃の対象とし、宗教上の概念を無力化することが目的の場合もありますが、これも宗教を利用した搾取の一例と言えるでしょう。

預言者ﷺの生前のマディーナで、預言者モスクに取って代わろうと建立されたマスジドなどは、これが発端となって噴出したムスリム同士の差別といった問題も含め、宗教を利用した搾取の典型的な例です。「マスジド・アル＝ディラール」と呼ばれたこの建造物について、クルアーンでは次のように説明されています。

「害と［真理の］拒否とをもたらし、信仰者たちのあいだを分かつために、また以前にアッラーとその使徒に対して戦った者たちの控えの場とするためにマスジドを設けた者たちがある。彼らは、『ただ善のみを意図してのことです』と誓うだろう。しかしアッラーは、彼らが嘘つきであることを証言する」[1]。全能のアッラーは預言者ﷺに、「決して［礼拝のために］そこに立ってはならない」[2]と警告し、こうしたことは終末の日にいたるまで何度でも起こりえるため、宗教の悪用や不穏な動きには常に注意を払う必要があるとも説いています。マスジド・アル＝ディラールを建立した人々に対する預言者ﷺの強い反応には、現代において宗教を悪用しようとする人々にどう対処するべきかが示されています。

イスラームの歴史において、クルアーンの悪用がもたらしたもっとも悲劇的な事例のひとつがスィッフィーンの戦いです。のちにハワーリジュ派と呼ばれる、暴力に基づくこの政治運動は、いわゆる「クルアーンの守護者」のように見せかけつつ、実際には社会の混乱に拍車をかけるだけでした。同様に、グラートと呼ばれる一部の過激なシーア派系の集団も、自らの逸脱したイデオロギーを正当化するのにクルアーンの章句を利用します。その他、近現代になってイスラーム世界に出現したカーディヤーニ派、バーブ教、バハーイー教、ドゥルーズ派といった多くの集団もまた、躊躇なく宗教を利用しています。

1　クルアーン9章107節
2　クルアーン9章107節

テロ組織による宗教の悪用について：ダーイシュ編

ご都合主義者が乱用するのはクルアーンだけではありません。彼らにとってはハディースの言葉、模範となる教友たち、歴史上の人物、イスラームの価値観や概念なども利用の対象です。多くの個人やグループが、さまざまな名称を用いて出版や講演を行っています。彼らはイスラームについて語っているようにみえても、実際には自分たちの利益のために活動しています。

実際にはムスリムたちの純粋な感情を搾取する詐欺をはたらいていながら、自分たちはあくまでも人々を宗教に招いているだけだと主張します。イスラームの基本的な典拠、理性、論理とは矛盾する誤謬や物語、幻想、そしてサワーブ（精神的な報奨）といった虚偽の約束をちらつかせて人々を欺き、お金や子ども、時間、ときに人生そのものさえ奪うのです。

宗教を利用した搾取は、現代ではムスリムのウンマ（共同体）としての連帯と団結とをおびやかす深刻な安全保障上の問題にもなっています。フェトフッラージュ、ダーイシュ、アル＝カーイダ、ボコ・ハラムといった、宗教を名乗り、イスラームの代表者であるかのような主張をもって不和を生じさせ、流血をもたらすテロ組織による最大の損害をこうむっているのはムスリム社会であり、私たち全体の団結と連帯、また私たちの未来や若者たちなのです。

実のところダーイシュとは、
ある意味では権力、
兵器、石油貿易をめぐる
国際的な争奪戦の中で生じた
「あやつり人形」のような、
主体なき構造といえよう。
別の見方をすれば、
イスラームの慈悲のメッセージと、
特に西洋社会に住む
若い世代との間に
障壁をもたらすのに利用される
心理的ツールでもある。

ダーイシュはどのように出現したか

ダーイシュや類似するテロ組織の台頭や、そうした組織の罠に陥るムスリム若年層の存在は、宗教ではなく経済的、政治的、社会学的、文化的な理由によるものです。旧ソ連によるアフガニスタン侵攻、英国・米国によるイラク戦争、9･11米国同時多発テロ事件、行き詰まりをみせるパレスチナ問題、「アラブの春」における市民の民主化要求に対する強権的な弾圧、そしてイスラーム世界に存在するさまざまな抑圧に対する国際社会の沈黙など、いずれもムスリムが多数の社会に絶望と無力感を引き起こしています。基本的な権利を奪われ、抑圧の下で生きることを余儀なくされた人々は、怒りの感情や復讐心のために搾取されやすくなります。健全な宗教教育を受ける機会がなかった人ほど、社会を変えることのできない苦しみや、たった一人で不正に対し立ち向かわねばならない痛みのために、簡単に騙されてしまう状態に置かれています。イラク戦争後、地域にもたらされた不透明な政策や混乱した政治状況、終わらない暴力、投獄、拷問、祖国を追いやられた何千、何万もの難民といった背景も相まって、過激な組織が自分たちの思惑通りに活動できる機会を与えてしまったのです。一方ではありとあらゆる種類の貧困が、他方では覇権への飽くなき欲望が、ダーイシュと呼ばれる凶悪な組織の

出現となる土壌を形成したのです。

実のところダーイシュとは、ある意味では権力と、武器・兵器、そして石油をめぐる国際的な戦略物資の争奪戦の中で生じた「操り人形」のような、主体性なき組織といえるでしょう。別の見方をすれば、イスラームの慈悲のメッセージと、特に西洋社会に住む若い世代との間に障壁をもたらすのに利用される心理的ツールでもあります。その背後には、利害をめぐる狡猾で冷酷なある種の深いつながりが存在します。人種や肌の色、宗教、性別、国籍を問わずすべての人類に多大な犠牲を強いるその他のテロ組織と同様に、ダーイシュもまた、不誠実さと無慈悲さを養分として肥大化します。

宗教の名の下に、アッラーの勇敢な戦士を自称するごく少数からなる集団が、獰猛な暴力をもって人権を侵害しているのです。あらゆる人間的・倫理的価値観を無視し、良心も、神聖な価値観も持たないこの集団に引き寄せられた若者たちは、実際には駒として利用されていることにも気づかず、イデオロギーに縛りつけられたやり方で襲撃と破壊を繰り返しています。

ムスリムが多数の地域にこうした流血沙汰を引き起こす組織が出現し、イスラームの教義を利用しているのは偶然ではありません。ダーイシュもほぼすべての周辺国の政府当局との間で問題を抱えていますが、

テロ組織による宗教の悪用について：ダーイシュ編

それでも人的な資源と財源とを得ることができています。この事実は、イスラームを偽装することがムスリム社会を猟場として若者たちを狩るのに役立っているということの証明であり、この問題の根深さを表しています。

ダーイシュをはじめ、同様の組織が出現した地域で信仰されているのが別の宗教であれば、その宗教を利用したであろうことに疑いの余地はありません。こうした組織を宗教解釈の産物、あるいは宗教を曲解した結果であると説明することはできません。彼らは宗教の目的ではなく自分たちの目的のために「宗教的な言説」を用いているのであり、暴力を正当化するのに宗教をツールとしているにすぎないからです。

ダーイシュに加わる若者たち

このような組織の人員は、主に四つに分類される若者たちで構成されています。第1のグループは、暴力と残酷が支配する紛争地帯で育ち、深刻な貧困に苦しみ、人間の尊厳を踏みにじられ、生きる喜びを奪われてきた若者たちです。識字率も低く、宗教教育も受けておらず、専制政治の抑圧に苦しんでいます。

第2に、「旧植民地からの移民」の子どもたちからなるグループがあります。西欧で生まれながら疎外さ

れ、よそ者として扱われ、侮辱され、差別的な環境で育ったために自己肯定感が十分ではありません。ありのままの自己を表現する、尊重されるといった経験に乏しく、満たされなさを抱えています。加えて宗教教育を受けていないことも多いため、「信仰の危機」に直面するとより過激な宗教的表現に容易に騙されてしまいます。

第3のグループは、正しい典拠から、あるいは十分な善意と知識を身につけた人からイスラームを学ぶ機

組織に加入してしまう人の中には
「旧植民地からの移民」の
若者たちもいる。
西欧生まれの彼らは
成長の過程で疎外され、
周縁化され、
侮辱されるといった経験をしており、
そのため
自己肯定感が十分ではない。

会のない、改宗したばかりの若者です。彼らは、イスラームが慈悲の宗教であることを理解できていません。宗教的な知識が欠如しているため、あっという間にテロ組織の罠に陥ってしまいます。

第4に、組織のヒエラルキーには直接 関与していない若者たちがいます。組織の言説や行為を通して、ジハードや殉教、楽園といったイスラームの崇高な目的が実現できると信じ込んでしまっています。こうした組織は、若者の宗教的な感受性や情熱を悪用し、イスラームの概念を利用したテキストを通して彼らを管理し、動機づけようとします。若者が、組織のそうした意図に気づいても、取り込まれてしまった後では、どれほど脱退を望もうと、彼らを陥れたこの非情な組織に阻まれてしまいます。

これら4つのグループに共通する特徴は、全てがある種の抑圧下に置かれ、虚しさを抱えている点です。正しい典拠と情報源からイスラームを学ぶ機会に恵まれず、シンプルでバランスのとれた、受容的で包括的なイスラームのあり方に触れたこともなく、イスラームの基本的なコンセプトを知りません。信仰とはすぐれた道徳と崇拝の行為によって育まれるべきものであることや、信仰者とは「他者にとり、その行動と言葉が安全な者」であることを学んでいません。善行と慈善を命じ、迫害と拷問を禁じ、「信じる者たちよ。あなたがたは一途に平安に入りなさい」[3]と呼びかけるイスラームの本質を知らないのです。

ダーイシュによる宗教的テキストの乱用

私たちの預言者ﷺは、イスラームの原則を説きつつ、それを日常生活の中で正しく理解し、実践する方法も教えました。言い換えるなら、彼ﷺは方法論を採用したのです。ムスリムはこれに従い、信仰の基本と日常の実践を決定づけるための、クルアーンとスンナに基づいたいくつかの規則を取り入れることになりました。私たちの預言者ﷺはこの知識の分野を整えて、サハーバたち（アッラーのご満悦あれ）に教えました。場当たり的な思考や恣意的な解釈、不規則な習慣が排除され、サハーバたち（アッラーのご満悦あれ）から、宗教的な裁定や章句の解説、スンナの実践が、タビーウンと呼ばれる次世代の人々に伝えられました。この知識の蓄積を、世代から世代へと受け継ぐことにより、イスラーム思想は非常に一貫性のある、洗練された健全な知性へと発展したのです。

こうした正しい理解の範疇にない理解や解釈の試み、あるいはイスラームの意図と目的を無視したイデオロギー的な解釈の試みは常に存在していました。

3　クルアーン2章208節

現代ではダーイシュもまた、自分たちの主張と行為の裏付けにしようと宗教的なテキストを乱用していますが、その根底にあるのは背信と造反です。ここで重要なのは、いわゆる宗教的な議論を用いるのにどのような手法も原則も考慮せず、自分たちの利益にかなうならどちらへでも転ぶという図式が出来上がっているという点です。ダーイシュは言葉の前後を考慮しません。クルアーンの章句もハディースも非文脈化し、関連する根拠を改ざんし、宗教の主たる目的を無視して解釈しているのです。以下、この種の悪用の例を示します。

ダーイシュの直解主義とサラフィー主義とは

ダーイシュやその他の類似するグループは、自らをアル＝サラーフ・アル＝サーリヒーン（イスラームの第一世代）と関連づけることにより正統性を獲得し、価値を高めようとしています。自分たちの典拠として役立ちそうな直解主義的な傾向を、サラーフの中から探し出そうとします。そのようにしてサラーフのように見せかけ、自分たちを正当化していますが、実際に彼らが影響を受けているのはワッハーブ派運動です。ワッハーブ派は 18 世紀にムハンマド・アブドゥルワッハーブという人物を中心に形成され、現代においては宗教的な外見をまとった一種のイデオロギーとして知ら

テロ組織による宗教の悪用について：ダーイシュ編

ダーイシュのアプローチは
過剰なまでに残酷であり、
ムスリム・非ムスリム問わず、
たとえ女性や子ども、
高齢者であろうと、
組織と対立するあらゆる者の
殺害を承認するのに
「ジハード」という
崇高な概念を利用している。

れています。

ダーイシュが自分たちのネットワーク内で制作している印刷物やビジュアルに用いるイメージには、ワッハーブ派に近い様式が見られます。宗教の知恵の部分を置き去りにし、字面と形式のみを重視するダーイシュの性向は、偏見と敵意を煽るものです。知識のとなりに知恵を、行為のとなりに道徳を、統治のとなりに礼節を見ることのできないこの性向は「党派主義」そのものです。現実的でもなければ思想としての深みもなく、建設的でもありません。偏見に満ち浅はかで、破壊的な考え方です。

例えば彼らは、その媒体の中で「まぎれもなく、創造も命令もこの御方のもの」[4]という章句を根拠に、トルコなどで行われている投票選挙を断罪しています。[5]しかしこの節が説いているのは、全宇宙に対する全能のアッラーの支配についてです。地上のあり方をアッラーのご意向に沿うよう形作るのは人間のすべきことです。そしてクルアーンには、人間には「カリフ（代理者）」としての資質を与えられた存在として実践・管理する責任があることを説く節が数多くあります。

別の例では、この組織が、事前の知識も経験もなくクルアーンを読むべきであること、またその際には書

4　クルアーン7章54節

5　Konstantiniyye, 1437/4, p. 62.

テロ組織による宗教の悪用について：ダーイシュ編

かれたことだけを表面的・折衷的に読むよう推奨していることが分かります。これは、彼らの戦略にしっかりとした原理原則が欠けていることを示すという意味で印象的です。

どのような条件下でどれが啓示されたのかも知らずに、また預言者ﷺの言葉と実践を学ばずにジハードに関する章句を読むのは重大な誤りです。ところが、ダーイシュの一員であるアブー・バラー・アル＝ヒンディーは映像の中で以下のような発言をしています。「書を開き、ジハードに関する章句を読め。それですべてが明らかになる。学者たちは、皆『これは合法、あれは非合法、今はジハードの時ではない』などと言うが、耳を貸す必要はない。クルアーンを読むだけでいい。ジハードとは何であるかが分かるはずだ！」[6]

ジハードとは、人々が平和に暮らせるようにするためのファルド（義務）とされた崇拝行為のひとつです。そのジハードを、人々を安易に欺き、生きた兵器に変える目的で利用するのは、解釈の範疇を逸脱した理解の産物に過ぎません。

6　Risâle Meftûha ile'd-doktor İbrahim Avvâd el-Bedrî el-Mulakkab bi "Ebû Bekr el-Bağdâdî", p. 4-5 (http://www.lettertobaghdadi.com/14/arabic-v14.pdf).

ダーイシュの定義する「ムスリム」とは

この問いに一言で答えるなら、この組織が考えるムスリムとは、ダーイシュに従順な者、もしくはダーイシュの支配地域に住む者がムスリムであるということになります。それ以外のムスリムは、殲滅し、よそ者扱いし、タクフィール（背教者宣告）する対象として扱うのがダーイシュの姿勢です。組織に従わず、彼らの過激な表現を受け入れず、崇拝の仕方に欠陥があるとみなされた者は、ダーイシュからすればムスリムではないということになります。信仰とは「心による肯定、言葉による承認、行為による表現」であり、どれかひとつでも欠けていれば、それは非ムスリムである、というのが彼らのイデオロギーです。信仰者とムスリムに関するこのような誤った理解のために、ダーイシュは行為に何かしらの欠落がある人を非信仰者であると宣告し、ときに殺害にさえ及びます。

しかし大多数のアフル・アル＝スンナ（スンナの徒）を代表するマートゥリーディーとアシュアリーの両神学派は、信仰において実際に重要なのは「心による肯定」にあるとしています。具体的にはアッラーの存在とその唯一性と、信仰の諸原則を心から誠実に認め

ることにつきます。「アッラーの他に神はなく、預言者ムハンマドはそのしもべであり使徒である」というカリマ・シャハーダ（信仰告白の言葉）を唱えたことのある者は、全員がムスリムです。「言葉による承認」、言い換えるなら明示的に述べることを意味しますが、これは厳密には信仰の一部ではありません。しかし現世においては、これを口にした者がムスリムであるとみなされること必須です。行為、すなわち崇拝と善行は、信仰の求めであり、信仰の助けとなるものです。したがって信仰の原則、特にタウヒードを否定したり、侮辱したり、嘲笑したりするのでもない限り、たとえ罪人であろうと背教者とはならず、他者が背教者宣告をすることもできません。アフル・アル＝スンナの学者たちは、この原則について次のように述べています。「アフル・アル＝キブラに対し、背教者宣告をすることはできない」。

「タクフィール」とダーイシュ

タクフィールとは、ムスリムあるいはムスリムとして知られている者を非信仰者であると主張することを意味します。歴史上、この主張はさまざまな時代において武器として用いられてきました。多くの集団がこの方法で敵とみなした者を中傷し、疎外しようとしてきま

した。預言者ﷺは、自分は人々が「アッラーの他に神はなく、預言者ムハンマドはそのしもべであり使徒である」と言うまでは戦うよう命じられている、と語り、カリマ・アル＝タウヒード（神の唯一性を証言する言葉）を唱えたことのある者の生命と財産は保護下に置かれました。キブラの方角に向かって祈ったことのある者はアッラーとその預言者ﷺの保証を得ており、したがって背教者宣告の対象にはなり得ません。そのためムスリムに対し背教者宣告をした者は、自分自身を冒涜したことになる、と伝えています[7]。ダーイシュは、自分たちの政治的な敵とみなした場合、特にダーイシュと真っ向から対立し、彼らの真の姿を明らかにしようとする個人や集団に対してタクフィールを行います。タクフィールの理由としては、選挙や投票に参加すること、公務員として勤務すること、裁判所への申し立て、学校への通学といった社会生活に関連することが含まれています。ムスリムに対してタクフィールを行う者は、理性なくアフル・アル＝スンナの限度を踏み外し、ウンマの絆と同胞愛を傷つけていることが見てとれます。何百万ものムスリムを対象としたタクフィールのメンタリティによって、この組織は実際には自分たちの行動範囲を拡大し、彼ら流の「宗教」を基礎とした破壊と抑圧の支配圏を形成しようとしてい

7　ブハーリー『イーマーンの書』17, の書『サラート』28, 『アイマーンの書』7; アブー・ダーウード『ジハードの書』95.

ます。彼らの目的は人々に信仰を伝え、親愛を醸成することではなく、逆に暴力やテロを正当化することです。

「シルク」であると主張し、歴史的遺産を破壊するダーイシュ

「シルク」とは、全宇宙の創造主であり管理者であるアッラーに、その「同輩」として何ものかを並べることを意味します。ダーイシュの掲げる信条のうち、最大の誤りのひとつが、墓地や墓参をシルクと関連づけることです。墓を訪れ、アッラーの愛するしもべを通して祈りを捧げる人々をシルクの範疇にあるとし、躊躇なく偶像崇拝に関する章句に該当するものとみなします。

墓地を礼拝所にし、墓に眠る者に何かしら願いごとをする行為は、人々をシルクに追いやりかねません。しかし預言者ﷺのスンナに従って死者を表敬し、祈るのは墓参として合法です。理性ある人であれば、全員がその違いを認識しています。ムスリムはみな、全能のアッラーがその存在、その属性、その行為において唯一無二であることを信じています。アッラーのみを拝し、アッラーのみに願いを訴え、そしてただアッラーの恵みと助けによってのみ願いを叶えられるのです。したがって学びを得、死を想い起こすことを目的

として適切になされる墓参はシルクとはみなされません。墓参とシルクを関連づけるダーイシュの考え方は、歴史的遺産を破壊し、文化に対する敵意を示すことに現れています。この姿勢のもっとも顕著な例は、歴史的な遺物、特に預言者に関連する墓地の破壊です。ダーイシュはその歴史的・社会的文脈からハディースを切り離し、墓地に対する自分たちの破壊行為の口実として利用しているのです。加えて彼らは、彫像や聖堂、寺院といった歴史的遺物を破壊しています。ダーイシュの構成員たちは、国宝級の文化的な古代遺産の破壊を「偶像を倒す」と定義し、宗教的な行為であると考えています。しかし地上を旅し、歴史の痕跡から教訓を引き出すよう推奨しているクルアーンにある通り、「彼らは地上を旅し、その心で考え、その耳で聞いたことはないのか。彼らの目が見えていないのではない。胸の中にある、心［の目］が見えていない」[8]のです。

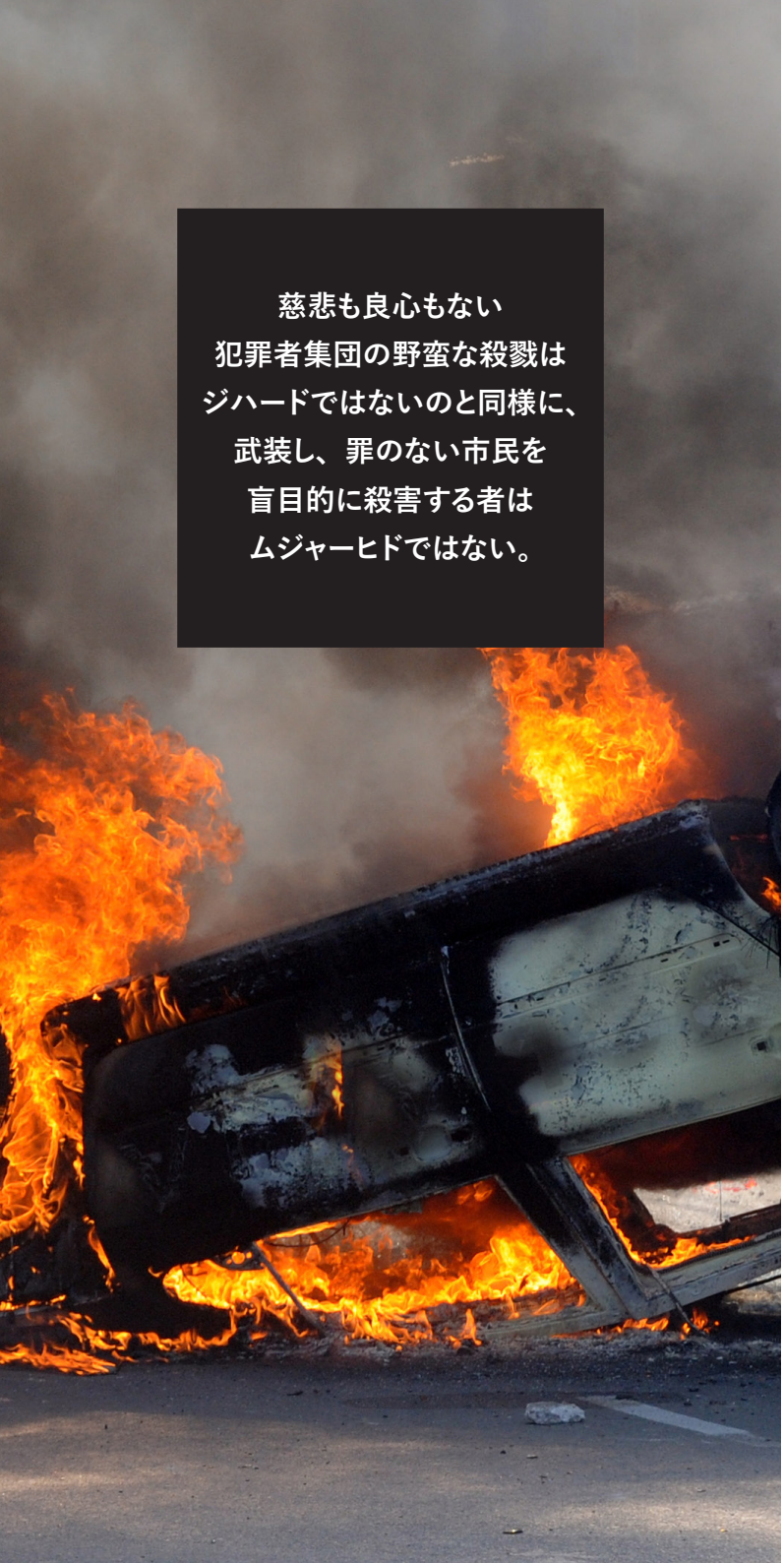
ダーイシュは完全に盲目的であり、歴史的な遺産を破壊し、さまざまな時代に課された神の試練に対する人類のあり方を示す物的な痕跡を抹消しています。しかし預言者ﷺのすぐれた教友のひとりウマルは、ダマスカスとバイト・アル＝マクディスを征服した際にも、元は預言者の墓であったと考えられていた建造

8　クルアーン22章46節

**ダーイシュは、宗教の名において
文化遺産や芸術作品を破壊することで、
イスラームには文化も芸術もなく、
気品もないという
俗説のイメージを広めている。**

物を取り壊したりはしませんでしたし、教会やシナゴーグを損壊したりすることもありませんでした。サラーフ・アル＝サーリヒーンとして知られるアブドゥッラー・イブン・ウマルも、サイイド・イブン・アル＝ムサイブも、預言者のミンバル（説教壇）で礼拝をしています。

宗教上の歴史的遺産に対するそうしたサラーフたちの態度とは裏腹に、「新たなサラーフ」を自称するサラフィー主義者たちは、イスラーム文明が発祥し発展した都市の記憶を、狂信的テロリストとなって破壊しているのです。これほど痛ましいことがあるでしょうか。宗教を理由に行われる文化遺産や芸術作品の破壊は、この組織を生んだ者の目的と完全に一致しているのでしょう。まるでイスラームには文化も芸術もなく、気品もないという俗説のイメージを広めることを目指しているかのようです。こうして若い世代の心に、非ムスリム圏で巻き起こる容赦のない非難が刻みつけられていくことになるのです。



慈悲も良心もない
犯罪者集団の野蛮な殺戮は
ジハードではないのと同様に、
武装し、罪のない市民を
盲目的に殺害する者は
ムジャーヒドではない。

フィタンに関する伝承とダーイシュ

フィタン（混乱や騒擾）についての伝承とは、終末が近づくにつれて起こると言われている出来事についてのハディースのことです。それらの出来事が起こると、終末が近づいている兆候であるとされています。歴史を通して、多くのグループが互いに衝突し、自分たちの立場を堅固にするために預言者ﷺの権威を利用してきました。自分たちの利益になるよう、彼らは多くのハディースをこうした目的に沿って解釈してきました。そうしたハディースには、さまざまな宗教的・政治的な理由から生じる社会的な対立や争いに関するフィタンの伝承も含まれています。ダーイシュはまた、終末が近づくと起こるというムスリムと非ムスリムとの大規模な戦闘において、自分たちが神聖な使命を引き受けるだろうという持論を公言しています。「アル＝マルハマ・アル＝クブラ」と呼ばれるこの戦いについての伝承も、ダーイシュによって本来の文脈から切り離され、彼らのプロパガンダの材料に変えられてしまっています。

ダーイシュが根拠として用いているハディースによると、現代シリアの国境に位置するアマーク、またはダービクで、ムスリムとキリスト者のあいだに大戦が勃発するまで、（終末の）その日は来ないとされています。キリスト者と対峙するムスリムの軍勢は、地上最高の

人々によって編成され、マディーナから出征してこの激しい戦いに勝利し、さらにイスタンブルを征服します。オリーヴの木に剣を立てかけたまま、兵士たちが戦利品の分配をし始めたところに、ダッジャールが現れ、残してきた家族たちの安全が脅かされているという噂が流れます。ムスリムたちがダマスカスに戻り、戦闘の準備をしているところに預言者イーサーが降臨し、ダッジャールを亡き者とする、とされています。[9]

ダーイシュはイスラームの軍を自称し、この伝承に基づいて自分たちを正当化しようとし、「タブークの戦い」の時がきた、と主張して、自分たちの軍に加わり参戦するよう、志願者をシリアに召集しています。しかし実際に迫害され、殺害され、財産を奪われ、住んでいた都市を破壊されたのは主にムスリムたちです。イスラームの預言者ﷺは、敵軍との戦闘においてさえ高潔にふるまいました。民間人、女性、子ども、宗教者の殺害を禁じ、報復を目的とした非人道的な行為を決して許しませんでした。

9　ムスリム『フィタンの書』34.

ダーイシュによる「カリフ制国家の樹立宣言」に正当な根拠はあるか

ダーイシュは、世界中の全ムスリムの唯一、正当な代表者であるという主張に基づいて行動し、自らを「イスラーム国」と称し、その指導者はいわゆる「カリフ」であると宣言しました。その後、組織はアル＝バグダーディーのカリフ制の正当性を根拠づけるために、イスラームの古典文献に基づいた大規模な宣伝活動を行い、書籍や冊子を発行しました。クライシュ族の一員であることは、カリフ位に就くための条件のひとつと考えられていますが、これを重視したのか、バグダーディーの血統は預言者の孫フサインを通して預言者ﷺその人にさかのぼるとする家系図を捏造しており、これはのちに虚偽であることが証明されています。

いわゆるカリフ制という規範を復活させるためにダーイシュが行っている闘争は、ムスリム社会におけるその威信と価値を利用したいという意図からのみ生じ、同様の闘争は何世紀にもわたって幾度となく繰り返されてきたものです。カリフ制やイマーム制に重きが置かれるのは、そうした概念の歴史的なカリスマが利益をもたらし、組織の構造を固めてくれるからです。こうした観点からすれば、ダーイシュの構造がカリフ制の条件を満たしているかどうかを議論することさえ無意味です。私利私欲のためにこうした概念を用いれば、イスラーム文明における団結、連帯、同胞愛の原則を損ねることになります。

歪められた「ダール・アル＝イスラーム」

「ダール・アル＝イスラーム」とはムスリムが統治する国家を、「ダール・アル＝ハルブ」とは非ムスリムが統治する国家を指します。いずれも司法および政治用語です。イスラーム初期の数世紀、これらふたつの概念にまたがるように形成された国家間の秩序は、時間の経過とともに徐々に変化します。ムスリムとの協定を結んだ国家が出現するにつれ、ダール・アル＝スルフ[10]、ダール・アル＝アハド[11]といった新たな用語も生み出されました。

地域社会間の関係性を説明し、法の原理を定めることを目的として、歴史上のある特定の時期に使用されていた用語を現代に持ち出し、タクフィール（背教徒宣告）に関する自分たちの理解を反映させるための道具として使用するのはまったくの誤りです。こうした概念は、時代や地域に応じてムスリム学者によってさまざまな形で理解され、解釈されてきました。問題となる概念（ここでは「ダール・アル＝イスラーム」）は、現在の国際法、政治、通商関係といった側面から、イスラームの学者たちの豊富な解釈経験をもって再考されねばならず、またイスラーム諸国の現在の政治構造を考慮に入れたあり方が優先されねばなりません。「イスラミック・ステート（イスラーム国家）」の名の下に、彼らは自分たちが唯一、合法的なムスリムの代表であると主張し、自分たちの支配地域にダール・アル＝イスラームという概念を当てはめ、イスラーム諸国を含むすべての国家をダール・アル＝ハルブであると宣言し、すべてのムスリムに対して、彼らの支配下にあるいわゆる「カリフ制」の地に移住するよう勧誘しています。そこがアッラーの法によって統治された世界で唯一の場所だというのです。これが彼ら自身の戦略を強化するためのフィクフ（法学）概念の悪用であることは疑うべくもありません。

10　「調停/条約の家」の意。

11　「休戦の家」の意。以上はいずれもムスリム・非ムスリムの間で合意が交わされ、信教の自由や自治、保護などが保証された領域を指す。

テロ組織による宗教の悪用について：ダーイシュ編

ダーイシュの定義する「ジハード」とは

「ジハード」とは、イスラームの教えに従って生きていく道のりにおいて、自分の内側にあるナフス（利己的な自我）や、外側にある敵と戦うために最大限の努力を払い、人々を宗教へと呼び招くことを意味します。したがってこの意味には、悪人や、邪悪に対するあらゆる種類の闘争、そして善と知識のために払われたあらゆる種類の努力が含まれます。「アッラーのた

めに、真理を尽くして励みなさい」[12] という章句や、「あなたの財、手、舌（言葉）をもって奮闘しなさい」[13] といったハディースは、この包括的な意味の例です。ダーイシュは「ジハード」という言葉を、迫害、抑圧、流血、遺体の露出といった、自己顕示癖の表出でしかなく、宗教文献には決して存在しない非人間的な意味に一致させようとしているようにみえます。敵と戦うという範疇を超えた、この過剰に残酷なアプローチでは、ムスリム・非ムスリム問わず、たとえ女性や子ども、高齢者であろうと、組織と対立するあらゆる者の殺害が承認されます。ダーイシュによると、クルアーンにおける概念としてのジハードは、ただ戦争のみを表しており、かつジハードの義務を果たす唯一の方法は、彼らの指揮下に入り、彼らの暴力行為に積極的に参加することです。

しかし、私たちの宗教においては、殺害ではなく復活を、人類に平和と静穏、繁栄をもたらし、より多くの生命を守ることをこそジハードと呼びます。それはアッラーの道において邁進することであり、真実のために努力することを意味します。神聖な価値観を守り、世界の不公正をなくすために、体（行為）と舌（言葉）、思考、そして心を通して自らの決意を示すことを意味

12　クルアーン22章78節

13　ナサーイー『ジハードの書』48.

します。慈悲も良心もない犯罪者集団の野蛮な殺戮がジハードではないのと同様に、武装し、罪のない市民を盲目的に殺害する者はムジャーヒディーン（ジハードを行う者）ではありません。テロ活動家はイスラームにおける真のジハード理解に関心を持ちません。一方で彼らによるジハード概念の悪用は、人々のイスラームに対する恐怖を掻き立てます。昨今では、これがムスリムにもっとも害を及ぼしています。

罪なき人々、ムスリム、民間人に向けられた攻撃をジハードであると説明するダーイシュのやり方は、イスラームに対する罪ですらあります。残忍な殺人をイスラームに帰すること自体、自分たちの利益を優先するこの組織が、どのようにジハードの概念を乱用しているかを示しています。ジハードについての健全な理解の発展が妨げられると同時に、戦争においてさえ守るべき作法があることを説いた慈悲の預言者ﷺのスンナ（範例）が侵害され、「もし彼らが和平に傾くのなら、あなたもそちらに傾き、アッラーに委ねなさい。本当に、すべてを聞く御方、すべてを知る御方」[14] と告げる啓典の章句が、故意に無視され続けているのです。

14　クルアーン8章61節

罪もない無辜の市民や、
ことに女性や子どもたちの
命を奪うやり方で
自分の命を絶つ行為を
「殉教」とは呼べない。
宗教に関わらず、
個人または集団への攻撃を
組織することは
許されていない。

イスティシュハードに関する ダーイシュの虚言と、その犠牲者たち

「イスティシュハード」とは、シャヒード（殉教者）になることを意図し、死に向かって歩むことを意味しますが、過激なテロ組織の文脈においては自殺攻撃を指します。ダーイシュによると、人が自爆テロの実行犯として参加する自殺攻撃は、美徳ある許容された行為ということになります。彼らがこの行為を擁護するのは、自分たちの勢力拡大に役立つからです。彼ら自身の言葉を借りるなら、「イスラーム国による征服の扉のほぼすべてはイスティシュハード作戦によって開かれた。イスラーム国は、前例なきこの俊英を有する世界で唯一の国家である。何千ものカリフのライオンたちは、イスラーム国ならびにその他の国においてこの作戦を実行する順番を待っている」。[15]

イスラームに従うなら、生命の安全は人間に授けられた基本的な恩恵の一つです。クルアーンでは、合法的な理由なくして故意に誰かを殺害することは、人類全体を殺害することに等しいと告げられています。この行為に対する罰とは、地獄に永遠にとどまることです。アッラーの怒りをこうむり、忌み嫌われ、恐るべき懲罰が用意されることでしょう。[16] 同様に、信託とし

15　Konstantiniyye, 1436/3, p. 43.
16　クルアーン4章93節

て委ねられている自らの生命を、自らの手で絶つことは誰にも許されていません。洞察力と慎重さを失い、自分自身で考えるのではなく他人の考えに従って行動する多くの人々は、自分はアッラーのために戦っていると信じ込み、「私は善に向かって歩んでいる」と言いながら悪に向かって歩み、「私は天国に行く」と言いながら地獄に行くのです。

ダーイシュによる殉教の概念の悪用は、かつて「暗殺教団」と呼ばれた集団と類似しています。ハサン・サッバーフも、若者たちに自分たちは選ばれた特別な者であると信じ込ませました。自分が描いたフィクションの世界像を裏付ける証拠としてクルアーンの章句を利用しました。天国に行けると約束され、酔いしれた若者たちに凶器の使い方を教えて社会に放ち、ムスリムにムスリムを殺害させたのです。

罪もない無辜の市民や、ことに女性や子どもたちの命を奪うようなやり方で自分の命を絶つ行為を「殉教」と呼ぶことはできません。宗教に関係なく、個人または集団への攻撃を組織することは許されていません。自爆テロ攻撃を「自殺」ではなく「殉教者を目指す行為」と呼ぶことは、「殉教」という崇高な理念の乱用に他なりません。殉教とは、イスラームとムスリムの敵を相手に戦場で戦い命を落とした者や、抑圧や迫害のために命を落とした者が得る高貴な位階です。罪なき人々の命を奪うことは「殉教」ではなく「殺人」です。

ダーイシュが公開する暴力的な動画の内実とは

ダーイシュが犠牲者を処刑するのに拷問を利用したり、メディアを通して残虐な動画を共有したりすることは、威嚇と宣伝を目的としています。テロ行為は恐怖の感情を引き起こす手段であり、脅威と抑圧によって強化されます。人々が恐怖すればするほど、また精神的に殺伐とすればするほど、彼らは「成功」したことになります。しかしそうした行為は、イスラームとその預言者ﷺ、その価値観について世界中に不安を引き起こすことにつながります。特にソーシャルメディアを通してこうした動画を公表すれば、若者たちが安心や信頼、思いやりの感覚をもたらすイスラームの雰囲気になじむことの妨げになるでしょう。もう一つ、この問題の重要な側面とは、こうした動画を削除する権限を持つインターネットのプロバイダー事業者、プラットフォーム事業者が、逆にこれらを一般に公開し続けている点です。

斬首が人道的行為でも、イスラーム的行為でもないことは言うまでもありません。私たちの預言者ﷺは、動物さえも虐待することを禁じ、戦いのさなかであってさえ限度を超えることのないようにと、戦場に赴く軍勢に対しても、「アッラーを畏れ、限度を超えないように、虐待や報復を避け、高齢の者には手を出さないように」[17]と命じたのです。したがって処刑や暴行の映像をソーシャルメディアに公開するなどあってはならないことであり、イスラームの原則とも相容れません。

17　ムスリム『ジハードとスィヤールの書』138.

暴力を正当化する宗教の悪用に、どのように立ち向かうか

- 私たちが最初にすべきことは、私たち自身の教育のあり方、特に宗教教育や育成の手法を見直すことです。これからの時代を担う世代に宗教を教える際には、章句が啓示された理由や、ハディースの知恵とそれらの目的、また他の章句やハディースとの関連性や相対的な位置づけなども説明すべきでしょう。宗教的なテキストの持つ意味を損ねることも、恣意的な解釈も許さない完全性を重視し、正真正銘のイスラームの典拠を若者たちに示してゆく必要があります。1400年以上に及ぶイスラームの伝統の中で培われてきた宗教を読み解き、理解し、解釈するためのスキルとメソッドをおろそかにすることを、決して許してはならないのです。

- 日常生活のあわただしさや、生計を立てることで精一杯になったとしても、子どもたちのことを放置していてはなりません。愛情や気配り、指導が与えられなかった若者ほど、歪んだ宗教的知識を提示する媒体に惑わされ、過激なグループに引き寄せられてしまうリスクが高いことを忘れてはなりません。

テロ組織による宗教の悪用について：ダーイシュ編

- 若い世代に対し、ムスリムは信仰と行為、そして道徳によって自らを完成させるということ、また形式や外見のみで中身を伴わない習慣は、私たちには何の役にも立たない、ということを教えてゆかなくてはなりません。地位や権力、権威や金銭といった現世の利益を求めることだけに限定された生活は、ムスリムにはふさわしくないということ、イスラームにおいては現世と来世の両方における利益を追求すべきであることを、若者に意識させなくてはなりません。

- イスラームの教えは、ムスリムだけではなくすべての人間に、さらには宇宙を共有するすべての被造物に慈悲と公正を差し出していることを、常に念頭に置いておく必要があります。イスラームとは恐怖と暴力の宗教ではなく、慈悲と恩恵の宗教であることを説かなくてはなりません。ダーイシュやそれに類するテロ組織によって引き起こされたイスラモフォビアに立ち向かわなくてはなりません。イスラームという宗教が否定的に語られたり、過小評価されたりするのを容認すべきではありません。宗教について語るときは、私たちの預言者ﷺのたぐいまれな模範のように、礼儀正しく、包摂的で、穏やかな語り方をこそ広めるべきでしょう。

- 私たちの至高の書にあるとおり、私たちは「中庸の共同体」になるよう努力しなくてはなりません。私たちの社会が極端な方向へ舵を切ったり、真実の道から逸脱したりすることのないよう、中庸を保ち、あらゆる場面において穏健さを忘れないようにしなくてはなりません。そのような社会は、アッラーの法則に従い、適切に行動し、道を踏み外すことのないよう気を配る個人によってのみ成り立つということを心にとどめておく必要があります。

- 偏見と狂信が引き起こす可能性のある、あらゆる混乱を遠ざけるべきです。偏見とは、批判や疑問をさしはさむこともなく何かに執着し、正誤を調べることもなくそのまま固執し続け、それに反対するあらゆる考え方や理解の仕方を敵とみなして断罪することです。たったひとつの宗教的見解を取り上げて、それを真理の唯一の代表であるとみなすのも偏見の一種です。「真理を見つけ、救済を得るための唯一の理解は私たちが所有している」といった考え方は、他人はもとより、自分たちのことも破滅へと引きずり込むものです。自分たち以外の人々による真実への旅を侮辱したり、自分たち以外の人々は信仰の輪から外れているとみなしたり、キブラ（礼拝の方角）に向かう心の持ち主、サジダ（礼拝時の平伏の姿勢）する額の持ち主を不信仰者呼ばわりするのは、同胞愛のあり方にふさわしくありません。

- イスラームの本質的に普遍な諸原則とは別に、変化し発展し続ける個人的・社会的生活の必要に応じて、啓典とスンナに基づく新たな解決や推奨が存在します。あるコンセプトを、歴史上の限定された意味ごと現代に持ち込んだり、主義主張の利益のために解釈を操作したりといった無益なことをする必要はありません。

- 学派や宗派、会派といったものは、イスラームをより容易に理解し実践するのに役立ついわばツールであり、イスラームの本質と矛盾することのない限り、多種多様な解釈は豊かさの現れであるとみなすべきです。自分の属する集団を高みにおいて、他の集団に属する人々が自分とは異なる考え方をする権利を有することを認めず、自分たちの考え方を押し付け、相手を論破することに必死になっている人々こそ、ムスリムを互いに対立させ、分裂させようとしているということを知っておくべきでしょう。

- 何世紀にもわたって私たちの宗教生活に命を与え続けてきたイスラームの知恵を守ってゆかなくてはなりません。イスラームの伝統とは、健全で真正な典拠によって培われてきたことに留意すべきですし、それは誤った信条からはほど遠いものです。イスラームの美徳、善良な道徳、そして霊的な深みに着目するべきでしょう。そのうえで、団結、連帯、同胞愛を大切にしてゆかなくてはならないのです。